

卷 頭 頌

紀元二千六百年を言壽き奉りて詠める歌并に反歌

會員國學院大學教授 佐 伯 有 義

葦原の瑞穂の國は 吾御子の知らさむ國と 事寄しよさし給ひし 神祖の命のまにま 皇孫は天の戸開き 八重
雲を道別に道別 高千穂の穂觸峯に 天降まし官居定めて 民草を慈愛しみまし すめろきの正しき道に 懇に
導き給ひ 次々に三代を重ねて 知食す西の偏は 御恵みの風に靡きて 物多に満足らひつゝ 人多に蕃息にけ
り 國內斯く立榮ゆるを 天津神御子の命の 明らけき大御心に 縮積の深く思ほし 百八十の國の何處に 都
をし定め給はゝ 天下の政をし 平らけく聞食さむと 御子等御親族等と まつふさに議り給ひて 大伴の益荒
武男を 瑞々し久米の子等を あともひて日向をたゝし 大船に眞楫繁ぬき 海原を伊漕き渡りて 御旗をは高
く靡かせ 野も山も踏みしたきつゝ 瑛の年を累ねて 鳥羽玉の月を重ねて 千早振神を言向け 服はぬ人をは
和し 空見つ大倭の國 玉手襖畝傍の山の 山本の草木刈そけ 檣原の底津磐根に 宮柱太敷立てゝ 高光る天
津日繼の 高御座高知坐して 御光は天に足らひ 御恵は國に滿ちぬる 御代よよの天皇命は 所かあとを受繼

きまして 穆ツガの木の彌ヒヤツキ繼キ々に 御掟ミツケのまにま知らし 天下オホホノカラの公民クニミチは 家の業ウヂノイ勤シメしみ勵ムみ 飛驒トク工ムツ打ツ墨ス繩ナハの 一
筋に仕奉ツカれは 四方ヨコの海浪ナミは靜シズカに 吹風フクは枝エを鳴ナらさす 國内クニナチはもいよ榮サカえぬ 然シカのみか時トキし來キぬれば 樞原スヅハラ
の御代ミヨの手振テに 政事セイジ返し給たまひて 神カミなから御代ミヨ知食チクし 大御稜威オホミツノ四方ヨコに耀トクき 今イマし我國内クニナチ舉トりて 燒錄ヒヤクの敏シ心ココロ
起タし 東ヒトカシの大海原オホウミに 並ナひ立つ國クニの悉シツ 動ユきななき基キを定め 永久トコユに榮サカえしめむと 大君オホキミの命イノチのまにま 武夫チノブツは太
刀執佩タチシツきて 諸越シロコの野邊ノヘに戦タケひ 老人オヤドコも婦女子メノコも 村肝ムラギの心ココロ一つに 家忘イハサマれ身ミも棚タナ知らす 程ほど々に仕奉ツカるを 此
月の今日こんにちの此日このひは 樞原スヅハラに聲國こゑ知らし 御光ミツナリの指初さしめしより 千年チヨウネンをは二度重フタヒね 百年ヒヤクネンを六度重ムツヒぬる よき年の
住すき日にあれは 其そのか御蔭ミカゲ仰あやみ 其そのか惠めぐみ仰あやみ 大八洲オホヤチ國内クニナチは更さらに 外國ウチノクニに罷たれる人も 此處こゝ彼處あゝ打集ウチツグひ
つゝ 諸手シロテをは高くさゝけて 萬歲マンザイを唱なふる聲こゑに 天地ツチノも悉シツとよむ 今日こんにちの良よき日は

反歌

畝傍山ノボリヤマたかねの松マツを仰あやみて聖ミコトの御代ミヨの昔ムカシおもほゆ

樞原スヅハラの御代ミヨの光ヒカリは東ヒトカシの海原ウミノヘひろく今いましかゝやく

御民ミタマ吾生われける驗あかしありと聲こゑ高く共に謳うたはむ老おいいにし我れも